

に優劣の差がついて来るものである。

こんな事から古端書を材料とした手技は幼児たちに大いに歓迎された。これは始めは、材料を節約するさいふ事からはじめてみた事であるが作るものが簡單であり、その大きさが手頃であつた事が最もよい材料となつた様である。

はじめ端書で、タンク、花カゴ、乳母車、舟、家、動物など數種類のもの、幼児たちの前で作つて見た。自分の作るのを見てゐたものは、傍にある端書で真似て作り始めた。自分は一々説明するさいふ風でもなくたゞ一緒に作つてゐた。時々こゝはさうするの位の質問に應じる程度であつたが、次々見ただけで簡單に作れるのでよろこんだ。

次の日から各児が家庭から古端書をもらつて来て、次々種々様々なるものを作り出した。タンクなども自分が作つて見せたものよりも、はるかによいものが出来る。自動車も出来て来る、汽車も作るさいふ様で製作される種類も多くなり、形などもほんごにうがつたものが出来て幼児も楽しみ自分もうれしくなつた。幼稚園の端書も家庭の端書も大方便ひつくす位澤山にいろ／＼のものが出来た。

官製はがきは紙の質がよいので曲げたり、折つたりしても決して裂ける事がない。インクや墨で書いた文字のあさも、クレヨンや、繪具や墨でぬりつづせば綺麗になつて古物を利用した様にも見えない。

幼児たちが自分だけで作つた作品の二三をあげて見ることにする。

幼稚園の水

杉山米子

○初水

「先生ホラー！」「いゝものよオー」風のとめたい朝である。後の焚火が樂しみの落葉かきの熊手をやすめて、聲に振向く、二三人の男の子が、もみぢの手を拜む様に顔の前に合せ、然も大切なものを其の中へ入れて居る様にかばひ乍ら、一寸小腰をかゞめてかゞで走つて来るのである。

うれしくて／＼たまらない様に遠くから白い息を見せて叫び乍ら、……其の氣持が自然に私の胸へ樂しく流れ込んで来て、「なーに？」「思はず走りよる。「ほら、水。お池にあつたの」先づ一人が得意氣にバツミ手をあげる。半ば水になつた中に滑る様にキラリミ光つた水！「まあ、本當に水ね、お池に張つて居たの？」「ウン、一杯い、ほら僕だつて……アラないやアー」今迄大事に合せて居た手をソット開いた子が、さも驚いた様子、否本當に驚いて、そして惜しくてたまらないと云つた氣持を語尾にひく。「まあお水になつて了つたのね、未だお池にあるかしら？」お池に行

つて見るに、もう子供達が其の可愛い手で、足で、充分堪能した後らしく、此の冬初めてのうちすらひが、千々にくだけて弱々しい黄色の冬朝の陽ざしにキラリ／＼光り乍ら池の面に散つて居る。「まあきれい」思はず一ひら掬ひ上げるに、かげらふの様な湯氣をあげて忽ち水になつて行く。

「僕にもさつて」「先生僕にもよ」差出す手の上に一ひらづつせる。「誰のがサーキにさーけるか?」一人がふしをつけて云ふさ輝いた目が自分／＼の手を真剣に見つめる。私は溶けて行くうすら氷を透して、曠色にかじかんだ子供の手先を、又なく可愛いものさ見されるのである。「もう僕のなァーい」僕のは未だ少しあるよ、ね?」「けむが出てるね」僕の氷、模様みたいな筋がついてるよ」「あ、僕のだつて、葉つばみみたいな模様だよ」子供同志の美しい話し合ひを後に、私はこゞへた可愛いもみぢが早く温められる様にさ急いで焚火の落葉をかきに行く。

○池の氷

「先生Aちゃんがお池に落ちちやつたの」

「えゝ?」此の寒い日に、「云ふ心で驚く私の聲は、敏感な子供に忽ちうつる。それで御注進の子供は急いで私をなだめでもする様な調子で」「だつて氷の上のつたのよ、だから落ちちやつたの」、まあ足だけでよかつた」「さ考へ乍ら其の子さ一緒にやつて見る。困つた様な顔で、もうぬ

れた靴下を片方吊下げて居るAちゃん、ね? さうでせう?」「云ひ度げに見上げるBちゃん、「あゝ一人で脱げたのね、今すぐ温い靴下さきりかへて上げませうね」今度こそ子供も安心する様な調子で云ふ。お部屋のスTEAMの傍で靴下を替へて居る時Aちゃんがのさかに云ふ。「氷ね、ミシ／＼さ言つたのよ」傍からBちゃんが「バリツつて音がしたわ」又Aちゃん「お父様がね氷の上は歩いたり滑つたり出来るんですつて」云ふ。扱こそ私は、Aちゃんがお池に落ちる迄、を考へて思はず笑ふ。「さうね、もつさ／＼大きなお池で、もつさ／＼厚い氷の張るお池があるのよ」、「さここに?」さ聞いて居る瞳、黒い瞳。

○お飯事の氷

「先生、コーヒー茶碗が一つ足りないの」お飯事の小さいお母様が、お茶碗を探しあぐねて助けを求めぬ。「さう?」さここに行つたでせうね」戸棚の中、棚の上、そしておしまひにお窓の張出しにやつさ見付けた。所がさても素晴らしいお土産つき、昨日お水を入れたまゝお窓の外に忘れられたコーヒー茶碗の中にはゆふべの中にツル／＼さお茶碗の形其儘の水が出来て居た。「アイスクリームよ、之アイスクリームよ」お皿に入れておさじもつけるのよ」「私の食べた時ウェファーがついてたのよ」思ひ掛けない御馳走にお飯事は大賑ひ、其の中に、「先生お茶碗にお水入れてお窓

の所に出しておけば氷になるの?」「え、ゆふべの様に寒ければね」「先生シロップの氷も出来るの?」シロップは色紙の切屑(之が冬のおまゝ事の御馳走の王座を占める)をしぼつて色をつけた水の事である。「あゝ本當ね出来るかもしれないわ」思はず私迄むらゝゝ好奇心にかられた。そこでお飯事のお母様もお姉様も女中さんも赤ちやんも、お客様の私も、早速あるだけのコーヒー茶碗に、赤、黄、みざり、紫ミ、みりぐゝの色紙を夢中でしぼり出してお窓の外へ竝べたのである。

所がシロップの氷の後日譚は遺憾乍ら不成功の報告をしなければならぬ。其の晩が暖かつたせいか、混合物のお蔭で温度が降り切らなかつたせいか……でも子供は時々思ひ出しては「シロップの氷作りませう」ミ根氣よくお窓の外へお茶碗を竝べて居る。

〇つらゝ

つらゝ、きれいなこぼである。そしてきれいな其の姿である。幼稚園の池に落ちる小さな瀧には、さうかしてきれいなつらゝの出来る事がある。早速之を見つけた子供達には、つらゝ云ふ名前がなかゝゝ覺えられない。

「ね蠟石だよ、ホラね、かけるでせう。」

陽あたりの温まつた石疊の上につらゝで繪を描く子が居る。溶けてしたゝる水はまぎれゝゝに蠟石のお役目を果

す。又いつか無口で大人しい女の子が珍らしく手に入れたつらゝを(つらゝは大抵朝早く来る元氣な男の子の所有に歸するのだ)、大切にハンケチに包んで、だまつてお辨當のバスケットへ入れに行つたのを見た。私もつらゝの溶ける事を、遂云はないでしまつた。其の子も、お辨當の時に見出したであらう溶けたつらゝの事は少しも云はなかつた。

〇幼稚園の氷

幼稚園の氷の事を書いて居るミ、次から次へミ盡きないものがある。そして、氷が、あの冷いゝ氷が、幼稚園の冬の朝をみんなにかゆたかに楽しくして呉れる事を今更の様